

氏名（本籍）	シノ 四	ミヤ 宮	ヨシ 義	トシ 俊	（神奈川県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第206号				
学位授与年月日	平成20年3月25日				
学位論文等題目	〈作品〉 躯体になるもの一連作 〈論文〉 躯体になるもの				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	関	出
（論文第1副査）	〃	准教授	（ 〃 ）	佐藤	道信
（作品第1副査）	〃	教授	（ 〃 ）	梅原	幸雄
（副査）	〃	〃	（ 〃 ）	手塚	雄二
（ 〃 ）	〃	准教授	（ 〃 ）	斎藤	典彦

（論文内容の要旨）

鉛筆や筆を持てば、誰にでも「もの」を描くことは可能だろう。だが出口を設定しなくても、はじめることの出来る行為は、自由なだけに落としどころのない表現となることも多い。現代において作品に関するあらゆる道具は、私がつくらなくても目に見えない他者によって地球のどこかで作られており、私ができることについて頭を悩まさなくても、それを使って絵画を成立させることが出来る。自由な表現は、その躯体をどこに持たせかけるのだろうか。私はそれらの表現に対する着地点として、「素材」や「場」をあらかじめ設定することで、無作為な制作を回避出来るのではないかと思うようになった。そのためにはどのような活動を行うべきなのかについて考察した。

第1章では、これまでの制作活動において何に違和感を感じ、問題点としたかを記した。もし私が、自身の作品を目の前にして記憶を無くしてしまった場合、目の前にあるモノが「無用」なものか、それとも「有用」なものなのかを判別する事が出来るだろうか。

言葉にできない好奇心や衝動のようなものが作品を作らせていた事もあるだろうが、それは文字通り他者に説明できないものであり、作品を介したコミュニケーションは、およそ他力本願なもののように思える。仮に作品の提示場に制作者自身が出かけて「意味付け」を行なっても、自身の作品が他者によって語られる余地を奪う行為になってしまうような感覚を抱くだろう。そのような作者による作品の「回収」作業は、作品を「有用」なものにしてはくれないだろう。かといって作品の意味付けを美術館やギャラリーの場の力によって、受動的に付加されるのも、社会から隔絶された空間の中に作品が「接收」されていくような感覚を覚える。そうした不安定な動機付けは、自身の作品を絶えず制作の脅迫と延命の脅迫に晒している。まず、制作側からの一方通行の衝動とは違った手段で、制作を行っていくために、「場」と「素材」を見直すことから始めることにした。

第2章では「画材」と「素材」をキーワードに、それまで具体的に使ってきた道具や材料を考察し、材料面から制作姿勢や動機付けを問い直した。

具体的な方法として、東京芸術大学取手校地にある日本画実験植栽園での活動を上げ、そこで取り組んだ活動がどのような変化を私の制作に与えたのかを述べた。

実験植栽園で多種にわたる植物の栽培に実際に携わった体験は、画材に対する私の価値観を変えるこ

とになった。美術のために理想化された〔画材〕という特殊な存在が、より広い意味で、生活に欠かせない多面的な〔素材〕の一部へと変わったことは、自身の活動の大きな転機になった。絵具屋や画材店でしか見る事の出来なかった〔画材〕が、〔素材〕として目の前に生い茂っている様は、入口から出口まで特殊な流通経路で成り立っているように見えた美術と、それに関わる自身の不安定な社会性を回復させてくれるように感じた。さらに種から〔素材〕を育てたという実感は、単なる昔のやり方への懐古趣味のような行為を、前向きなものにしてくれた。その過程は、〔量産〕ではなく、最終的な素材の出口まで想像出来る〔生産〕に繋がっているように思えた。

第3章では、私の生活する土地や地域を舞台に、スケッチや聞き取りを行い、そこで、実際に生活を営む人々や職人に現れた、掌や身体の変形を通して、そこでの私の制作と〔場〕の関係を考えてみた。

一制作者が抱えられる世界観は、至極当然の日常生活の中で作られていくものではないだろうか。社会や生活の中に、作品制作が一つの連鎖を構築出来るかどうかは、制作者の使っている素材や、活動の場の特性を、理解し共有できるかどうかにかかっているのではないかと思う。あたかも職人の掌が、その分野に特化した道具のような形状をしている様子は、社会の一部を形成している歯車のように見えただろうか。職人が歴史を知っている訳ではなく、その容姿じたいが永い歴史の一部としての明瞭さを持っているように見える。それを踏まえると、私の活動はコンセプトや概念からなる〔創作〕ではなく、身体行為の継続からくる〔製作〕であるべきだと考えるようになった。〔場〕と付き合うことの制約は、窮屈と考えられるかもしれないが、制約が何もない不明瞭な表現よりも、可能性をもっているように感じる。そのような制作方法を構築することが、一応の帰結点のようなものではないかと考えている。

第4章では、〔場からの接収〕の回避を目的とした試みを、いくつかの私の作品から具体的に説明した。

この章では、新たな視点として〔景観〕というキーワードを加え、作品が構成される〔場〕や、具体的な〔土地〕の中で作品を提示する方法について考えた。

作品は、制作者の下図や頭の中だけで完結する訳ではない。制作者が仮に、アトリエなどの室内から俯瞰したような図面ありきで計画を進めれば、その〔場〕や土地の持っているスケール感は、急速に鮮度を失っていくのではないだろうか。大事なものは、〔場〕や土地の外側から俯瞰するのではなく、土地の直中からその俯瞰を想像する事ではないだろうか。そのために、内側のキャラクターとして制作者自身が存在しなければならないと考えるようになった。いずれにせよ、無作為な創出や無邪気な衝動は、制作者が活動する土地が有限である以上、否定されると思っている。そうした構想に沿った制作を検証し、制作者としての自身の位置づけを、より明確に自覚したいと考えた。

最後に、各章での論考を集約し、今後の展開に向けて導きだされた問題点を述べた。

この先連綿と続けていくことになる制作を、至極当然の〔生活〕として捉えなければならないことを、あらためて自覚した。

〔表現〕が、浮世離れした〔場〕を想定しているのに対して、日々呼吸するように制作を行うために、各章で論じたテーマを総合的に捉えて、結びとした。